

G 特別支援学校（肢体不自由）

（1）学校の概要

G 特別支援学校は、肢体不自由および病弱特別支援学校である。在籍数は、小学部 97 人、中学部 71 人、高等部 74 人である。また、病弱学級・訪問教育を有している。教育課程は、教科（準ずる）を主体とする学習集団、教科（下学年適応）を主体とする学習集団、合科・統合（生活）を主体とする学習集団、自立活動を主体とする学習集団の 4 つ設定されている（平成 27 年度学校要覧より）

（2）ICT 活用の状況

機器整備状況としては、タブレット型コンピュータとして、iPad Air2 を 11 台、iPad を 6 台、iPad（トーキングエイド中心・ケース付き）を 2 台保有している。利用方法としては、新しい機器を学部毎に定期的に交代しながら活用している。

校内の ICT を推進する分掌は情報教育課であり、タブレット型コンピュータの扱いや、授業アプリの紹介、体験的な内容を中心に、校内研修会を年 2 回程度実施している。その他、有志で学習しあう同好会が設置され、授業での活用で困ったときに相談しあうなど必要に応じて意見交換の機会を設けている。

無線 LAN の状況は、教室内の生徒用 LAN 情報コンセントへ、無線アクセスポイントを接続し一時的に無線 LAN 環境を構築する方法を用いている。無線 LAN 利用の留意事項は、校内 LAN を生徒用と教職員用に分け、無線 LAN は生徒用を利用している。

タブレット型コンピュータのアプリの管理は県で行っている。また、クラウドの利用についても Google Apps の契約を県で行っており、県に申請することで Google ID を付与してもらうことができる。

ICT 活用については、話し合い活動において、調べたいことがあるときにタブレット型コンピュータを活用しすぐに調べることで、より話し合いがスムーズになった事例。小さな動きに反応することをねらい、小さな動きに反応し音が鳴るタブレット型コンピュータ教材を利用することで、指先、腕に意図的に力をいれている様子が見られたり、音に反応し口元などを動かしたりする様子が見られた事例。クラウド上でファイルを共有し、共同編集することを実体験した事例などがあった。

（3）事例

本事例は、中学部1年（平成 26 年度）教（準ずる）を主体とする学習集団、1名、英語（TOTAL ENGLISH（学校図書株式会社））で取り組んだものである。

生徒の課題として、本人が自分で教科書や資料をめくったりすることが難しく、人に言葉で説明したり、自分の考えを文章にしたりして伝えることも難しい。脳性まひがあり、アテトーゼが強く、手がバタバタし手を使った活動が難しいことが挙げられた。また、iPad を使用するときも本人が疲れているときは負担に感じてしまうので状態に応じて、姿勢をゆるめるなどの配慮が必

要となってくる。今回の英語の授業では話すことに関しては意欲があり、積極的に英語を使い話すことができる。聞くことに関してはキーワードとなる単語を聞き取ったりすることもできるが、聞き間違い聞き忘れがあり問題に対し正確に答えることができないときもある。読みに関しては、単語の意味を理解していないときもあり、別の意味になってしまうことがある。書きに関しては、既習学習の文法を使い積極的に文章を作ることができる。be 動詞や時制の使い方を間違ってしまうときもある。

ペンを手で持って書くことが難しいため、口でタッチペンをくわえてiPad のキーボードを打ち、ノートテイクを行う。板書が多いときや、資料提示やメモを書いた時はホワイトボードに板書した内容を撮影する部分を確認しながら教員が撮影し iPad に送り、生徒が大きさやレイアウトを調整し写真を貼り付けノートを作成する。テストの際は事前に Word で作成した問題や解答用紙を iPad にデータを送信して取り組み、生徒が回答できるように工夫している。今回の英語の授業では、毎回の授業の終わりに自己評価を行っている。iPad を用いて自己評価シートを記入することで、自分でチェックすることができるようになる。また、本時は新しい単元の導入である。言葉を発する活動と記入する活動を設けることで自分の考えをまとめることができると考える。

授業内容は、本時の Lesson 3 は飛行機でイギリスに行く単元である。海外旅行に行ったことがない A は飛行機の搭乗ゲート、機内での様子がイメージできないと考えられる。そのため、空港の様子や機内の写真を用意することで A が実際に旅行をするという設定をする。そこで、どのような表現をすればよいのか、適切なのかなどを生徒と考える活動とした。また、iPad を用いて、イギリスについてネット検索により調べさせる活動も行った。

iPad を使用して、言葉を発する活動と記入する活動を支援することで、自分の考えを整理しまとめることができた。iPad を利用し、板書の写真を取り込むことや、ノートテイクを行うことで、教師が口頭と板書で説明したことに対する、間違いを自分自身で修正することができた。さらに、記録を保存することで確認したいときに見ることができ、復習に繋がった。

(4) 特徴的な点に関するまとめ

本事例の特徴は、県に申請することでクラウドができることや、無線 LAN の整備であり、ネット検索により調べる活動が授業に取り入れられている。各教科を中心とした教育課程での実践であり、ICT 機器を筆記具として活用することで、ノートをまとめ、教科的な学習目標を達成している。また、内容によって、撮影機能とメモ機能を分けて活用している。さらに、テストにおいては、タブレット型コンピュータを利用した回答方法を実施している。検定試験や入試においても、機器による入力等、個人のニーズによる措置がとられるようになってきているため、日常的な活用が大切である。

(新谷洋介)

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究—学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理—」（平成 28 年 3 月）、82-84 に記載された内容である。